

アルザス史 5 プロイセンによるドイツ化

志村 良知

1871年5月、普仏戦争終結のフランクフルト講和条約で、アルザスはドイツ帝国の「エルザス・ロートリンゲン帝国領」となる。これもアルザスが望んでの事ではなく、新生ドイツ帝国誕生に湧く帝国臣民に押されたビスマルクによるフランス共和国からの強奪だった。ウェストファリア条約から200年間で溜まったフランス的なものは排され、親フランスのアルザス人数千名がフランス本土に追放されたが、ルイ14世によるフランス化ほど苛烈徹底的ではなかった。初等教育から大学まで純正ドイツ語で教育を行う政策が実施された。アベル先生に代わってベルリンからドイツ語の先生がやって来たであろう。

時は19世紀末、第二次産業革命。アルザスにも近代工業が勃興し、州都ストラスブールは近代工業都市となっていた。現在も現役で使われている皇帝宮殿、政庁、大学、中央駅（巨大な鞘堂に納められているが現役でTGVが発着している）などの壮麗な建築物が建てられた。コルマールでも、駅舎、県庁舎、裁判所、クアハウス、ショッピングモール、オフィスビル、劇場などが当時のドイツ建築様式で建てられた。これらの多くも歴史的建造物として保存されているのではなく、大部分は建築当時の目的のまま使用されていて現役である。

コルマールは旧市街の17世紀の建物（これも店舗や住宅として現役で賃貸もあり、フランス国の居住許可証があれば日本人も住むことができる）、新市街の19世紀から20世紀初頭の建築物、双方ともに本国では連合軍の爆撃で失われてしまったものが多いドイツ建築を求めてドイツからの観光客が多い。統一通貨ユーロ以前にもパーキングメーターはドイツマルクが使えた（ただしレートは1マルク=1フランで、マルクが3倍不利だった）。

コルマールの北東、ボージュの中腹に聳えるアルザス観光の目玉の一つ、13世紀に交易路としてのアルザスを支配したホーエン・シュタウフェン家により建てられたオー・ケーニッヒスブール城はその後の主は変わりつつも聳えていたが、三十年戦争でスウェーデン軍の攻撃によって落城し完全に破壊された。それを1908年に現在の姿に再建、ドイツ皇帝ヴィルヘルムⅡ世臨席で完成式典が行われた。しかし、いにしへの城の再建というには、内外装の全てがいかにも20世紀初頭のプロイセン風でホーエン・シュタウフェンを偲ぶ歴史的建造物としての価値は疑問とされている。それはともかく、ボージュ東斜面、標高760メートルに聳える赤い砂岩の壮大華麗な城郭は、アルザス平原との標高差が550メートル余

り、いにしへの築城目的の通りにアルザス平原を睥睨している。

ドイツ帝国による豊かなるアルザスの強引な奪取併合は、アルザスではなく、フランス中央・パリ政府の強い恨みを買うことになり、第一次大戦後のベルサイユ体制での仕返しの一因になる。ビスマルクはエルザス・ロートリンゲンの併合を強行すると遺恨になる、と考えていたという説もあるが、参謀長モルトケは強硬な併合論者だった。

1875年、ボージュの麓の町カイザースベルクで、後にアフリカのフランス領西アフリカ（現ガボン共和国）のランバレネで診療活動しノーベル平和賞を受賞する「密林の聖者」アルバート・シュバイツァー（アルベール・シュワイツァー）が、聖職者の子としてこの世に生を受けた。初等教育をチーズで有名なマンステール近郊で受け、ストラスブール大学でまず自分の教養と楽しみのために神学と哲学と音楽、30歳から他人の為に生きる、「最も人の為になる職業はアフリカの密林の中の臨床医師である」という信念によって医学を学ぶ。彼の生涯もフランスとドイツに翻弄されることになる。

彼の生家の教会は生誕記念館になっている。私はアルザス観光に来た第一線の医療従事者を別々に二人案内したことがあるが、二人の感激ぶりから改めて「実際に命を救ってなんぼ」の現場医療と密林の中でそれに生涯を捧げたシュヴァイツァー博士の偉大さを実感した。シュヴァイツァーと呼び捨てにすることを禁ずる、という医学部の先生もいたそうである。

その頃コルマールでは、町出身の彫刻家オーギュスト・バルトルディが、おっかさんをモデルにして、後に新大陸の入り口、ニューヨークで移民たちを迎えることになる自由の女神像の原作の制作に取り掛かっていた。バルトルディは独・仏どっちになっても尊敬を失わず、現代でもコルマールの誇りである。生家とアトリエは名を冠した博物館になっており、隣にはこれも名を冠したリセ・バルトルディ（バルトルディ高校）がある。私のアパートはバル高のすぐ近くだったので、毎日聞こえた礼拝堂のやや間の抜けた鐘の音が懐かしい。

そうそう、女性の日本人先生が指導したというバル高生徒による日本語劇『桃太郎』の熱演を観たっけ。これは入場有料で、細巻と稲荷の助六寿司弁当付き、現地一般市民のほかにアルザス一円の日本人在住者が一家総出で集まり、在ストラスブール日本国総領事館からの来賓が祝辞を述べるという大イベントだった。